学習でAIを使ってよい場面・注意が要る場面

学習のどの場面で、どう使うと、学習のねらいに合うのだろう

前提　AIの性質や注意（まちがえる・かたよる・入れてはいけない情報）を学んでから使う。学ぶ前に自由に使うのは注意

1 調べる	2 考える・話し合う	3 まとめる・表現する	4 評価・テスト
✓ ねらいに合う 教科書の内容を、自分の進み方に合わせて説明してもらう	✓ ねらいに合う 話し合いの途中で、自分たちに足りない視点を見つける	✓ ねらいに合う 自分の文章をAIに直させ、それをたたき台に自分で何度も推敲する（過程も出す）	✓ ねらいに合う AIを使って課題を解決する力を見る活動（パフォーマンステスト）
⚠ 注意が要る 教科書などの確かな資料を使う前に、AIで調べてすませる	⚠ 注意が要る 最初の感想や、詩・俳句など、自分の感じ方を大切にしたい場面で使う	⚠ 注意が要る 作品やレポートを、AIがつくったもののほぼそのままで出す	⚠ 注意が要る 定期テストや小テストで使う（学習の成果を確かめる目的に合わない）

使うかどうか、判断の目安

1 ねらいに合うか
そのやり方で、自分の力（考える・表す力）がつくか

2 きまりに従う
学校のきまりと、先生の指示に従う（使えない場面もある）

3 使ったことを書く
使った場面・指示・日付と、自分で直したところを書く

※ 文部科学省の生成AIガイドライン（Ver.2.0、2024年）の例をもとに、場面ごとに整理した。ガイドラインの改訂で変わることがある。